

〈実践報告〉

クラシック音楽を用いた絵本の上演3 『さつまのおいも』 — モデルタイプと制作方法論の検討 —

疇 地 希 美
嶋 田 ひろみ
山 本 八千代
吉 村 雅 美

要約

本研究では筆者らが過去の音楽会の実践活動を通して構築した、絵本とクラシック音楽を組み合わせた作品のモデルタイプと作成方法論の妥当性の検討を行った。子育て支援団体から依頼を受け、新たに制作した作品『さつまのおいも』は、これまでの実践経験から構築したモデルタイプに該当するように、かつ作品制作方法論に則り作成されたものである。この作品を、既に好評を得ている別の作品『スイミー』とともに上演し、演奏会後のアンケートを分析することで、これまでに構築したモデルタイプと制作方法論の検証を行った。アンケートの結果、観客からは既存の作品と同程度の評価を受けたことから、これまで培った経験を元にした作品制作方法論の妥当性が明らかとなった。

キーワード：絵本、クラシック音楽、乳幼児対象、演奏プログラム制作の方法論

1. はじめに

近年の研究から子どもに対する歌いかけや読み聞かせが親側の発達にも効果的であることが注目されている（田島、2018）。Malloch & Treverthen (2009) の研究をはじめ、母親と乳児の音楽的な声によるコミュニケーションが子の情緒的社会的発達を促すのに重要な役割を担う事が明らかにされている。一方で、母親等の子どもに近い大人が乳幼児に歌いかけることや、絵本を読み聞かせること、話しかけることを楽しむ事が親や大人側の生涯発達教育にも有効である事も研究や実践を通し、明らかにされている（田島ら、2018）。つまり親子間の歌いかけや読み聞かせというコミュニケーションを通じて、親側もまた、情緒の安定や子どもとの社会的相互行為能力の向上という生涯発達を促されている。

実際に、子育て支援の現場からは、母親のためにも乳幼児と一緒に楽しむことのできる絵本を用いた音楽会が求められている。それには、母親の歌いかけ・読み聞かせの技術の向上を目的としたものと、子育てに多忙な母親が音楽を楽しみリラックスできる時間を持つことを目的としたものがある。前者は家庭で日常的に行われている絵本の読みきかせとは違う表現に触れる機会として求められ、子育て支援の場において様々な形で行われている。後者の例として、イギリスのロンドンにある Wigmore hall の “For Crying Out Loud!” があげられる。これは 1 歳未満の子どもを持つ親と保護者のためのコンサートである。このプログラムは、子どもを主役にしたファミリーコンサートではなく、育児中の大人が子どもと一緒に音楽を楽しむ時間を持つ事ができるようデザインされた常時企画である（For Crying Out Loud! Wigmore Hall, <https://wigmore-hall.org.uk/learning/for-crying-out-loud>、2020 年 8 月 30 日閲覧）。

日本では幼い子を持つ母親などの大人のために音楽会が企画されることは少なく、親子を対象としたものが数多く開かれている。こうした音楽会は子どもが音楽家による生演奏に触れることのできる機会となっている。乳幼児にとって演奏時間の長いクラシック音楽を鑑賞することは容易では

無い。またクラシック音楽に慣れ親しんでいない母親にとっては幼い子どもを伴ってコンサートホールへ出かけるという選択はし難い。クラシック音楽を絵本と組み合わせたプログラムならば、乳幼児にもクラシック音楽鑑賞を可能にすることから、親子対象の音楽会で用いられる事が多い。しかし、乳幼児を対象とした絵本を用いた音楽の演目制作についてはその方法論は確立されておらず、子どもの発達の専門家ではない演奏家が経験を元到手探りでを行っている現状がある。

2. 絵本を活用した音楽プログラムの作成方法論とモデルタイプの確立

筆者らは音楽集団〈みらい堂〉を2015年に結成し、絵本とクラシック音楽を組み合わせた演目・作品を制作し、絵本の音楽会を開催してきた。こうした経験から絵本とクラシック音楽を用いた作品のモデルタイプの構築や制作方法論の確立を模索してきた。そして2018年10月に行った音楽会では、モデルタイプと制作方法論の妥当性の検証を試みた。

子ども読者の対象とする絵本には、乳児向けに多い、ストーリーが単純で繰り返しを多用した構造のものと、あらすじがはっきりとした物語が展開していくものの2種類に分けられる。前者は『もこもこもこ』（谷川俊太郎作・元永定正絵、1977）や『ぴょーん』（松岡達英、2000）、後者には『スイミーちいさなかしいさかなのはなし』（レオ・レオニ、1986）『さつまのおいも』（中川ひろたか）などが挙げられる。

これらのタイプの違う絵本のそれぞれに対し、筆者らは実践を行いながら「1冊1曲」モデル、と「ストーリー型」のモデルタイプを構築してきた。

「1冊1曲」型は絵本が持つ繰り返しの構造を音楽のフレーズの繰り返しや、展開にあわせることでその楽しさが増幅される。音楽に合わせて絵本を読み進めていく間に鑑賞している子ども達にもその繰り返しのリズムが伝わり、いつの間にか声を出したり手を叩いたり、また体でリズムを取ったり参加しながら聴き入ることが多い。躍動感のある曲を選ぶと身体表現にもつながる。

「ストーリー型」は物語の展開に合わせ、場面にあった音楽を選び、効果音なども楽器で演奏していくタイプである。音楽によって場面の転換や、登場人物の心情を表すことができ、絵本の世界観をより立体的なものにできる。絵本の画と音楽のバランスをとることや、楽器の見せ場をすることで音楽も絵本の中の一部として機能するようにプログラムを制作する方法を見出した。また、こうしたプログラム制作について様々な方法を論じ、実践を通して検証を行ってきた。例えば、絵本の文章を読む声と音楽のバランスについては、音を重ねる方が効果的であるのか、音楽よりも朗読を優先した方が情報が伝わりやすいのか等である。

本研究では筆者らが制作し、好評を得て再演を重ねている演目『スイミー』と、これまでのプログラム作成の経験を元に構築したモデルタイプを元に新たに作成した『さつまのおいも』を一つの親子向け音楽会上演し、保護者アンケートの回答を元にプログラムの出来を点数化し検証した。

3. 演目の作成

3.1. 絵本について

保育園で人気の絵本であり、音楽会開催の10月にふさわしい題材として、『さつまのおいも』（中川ひろたか文、村上康成絵、童心社、1995）を選んだ。これは作者である中川ひろたかが初めて書いた絵本である（SONGBOOK Cafe 中川ひろたかプロフィール <https://www.songbookcafe.com/nakagawa/profile.php>, 2020年8月30日閲覧）。この作品は季節の行事にちなんだ絵本シリーズ『ピーマン村の絵本たち』（2001年6月初版）の第1作にあたる。素朴で味わいのある絵と意表をつくストーリー等から長年子ども達に愛されている。

この物語には、擬人化されたおいも達が土の中でごはんを食べたり、歯を磨いたり、体を鍛える様子が描かれている。そして芋ほりにやって来た子ども達と綱引きをした結果負けてしまうが、焼き芋となり食べられた後に大逆転が起きる、というあらすじである。今回の音楽会の観客である乳

幼児にも身近な題材であり、起承転結がはっきりして分かりやすいストーリーであると判断し、この絵本を選択した。

上演に際し、この作品の大型絵本が出版されていなかったため、各ページを拡大してカラーコピーし、A3サイズのスケッチブックへ張り付け大型絵本として製作したものを使用した。

3.2. 使用楽曲について

誰もが一度は耳にしたことのあるクラシック音楽であり、綱引きの勝負の場面にふさわしい楽曲として『カルメン』組曲を選択した。この組曲はフランス人であるジョルジュ・ビゼー（1838-1875）により作曲された歌劇『カルメン』（全4幕）を、20世紀初頭のオーストリアの音楽学者フリッツ・ホフマンが曲順を変えて編曲・構成した組曲である（しばた、2018）。歌劇『カルメン』は1872年～1874年にかけて作曲された人気の演目である。オペラ版のストーリーは血なまぐさいものであるが、スペインの雰囲気と、名旋律が満載された情熱的な音楽が特徴的な作品である。

組曲のうち使用したのは《アラゴネーゼ》、《間奏曲》、《アルカラの竜騎兵》、《終曲（闘牛士）》である。《アラゴネーゼ》は活気に満ちたスペインの民俗舞曲であり、打楽器が活躍する楽曲である。《間奏曲》はハープの分散和音に乗ってフルートが旋律を奏でる、牧歌的で美しい音楽が特徴である。《アルカラの竜騎兵》はファゴットが旋律を奏でる素朴な曲である。アルカラは、地名を示す。《終曲（闘牛士）》は華やかで、熱狂的な楽曲である。

絵本読み聞かせのための編曲にあたり、楽譜はCHOUDENS版のピアノ独奏用のものを使用した。この楽譜はパブリックドメインとなっており、IMSPLペトルッチ楽譜ライブラリ (<http://ks.imspl.info/files/imglnks/usimg/4/49/IMSPLP20954-PMLP15769-Bizet-CarmenSte1-arrPf.pdf>) からダウンロードした。《終曲（闘牛士）》はタイトルコール前のオープニング、綱引きの場面、子ども達が芋を収穫して食べる場面、エンディング

で使用した。《アルカラの竜騎兵》はおいもが土の中で生活する場面、《間奏曲》はおいもが眠る場面、《アラゴネーゼ》は子ども達が畑にやってくる場面でそれぞれ使用した。これまでの制作で、オープニングの曲とエンディングの曲を同じにする、または、作品の中に出てきた曲をもう一度エンディングの曲として演奏するなどの手法を採用し、作品としての統一感を持たせた。この作品では、『カルメン』組曲の中で最もテンポ感が良く、一般的に耳なじみのある曲であると奏者らが判断した《終曲（闘牛士）》を、オープニングと、作品の途中2か所（綱引きの場面、焼き芋大会の場面）、エンディングの計4か所に使うという手法を試みた。*ff*で衝動的に始まる提示部をそのままオープニングに採用し、観客を一気に作品の世界へ引き込み、急に *pp* に変化する展開部を、子どもたちとおいもが畑で一列に向かい合い、静かに闘志を燃やす場面に採用した。また、そこから先のおいもの畑で起こっている一部始終の出来事を表現するためにあえて曲を変えず、テンポや楽器で変化をつけアレンジした。エンディングにも同一曲をおいもの勝利をたたえる曲として、再現部にグリッサンドの編曲を施して採用した。

3.3. 演奏者と使用楽器

演奏は最小人数3名で行えるよう編成した。今回の実践における各奏者の担当楽器を以下に示す。

奏者1：朗読、シンバル、（大型絵本めくり）

奏者2：ピアノ、スライドホイッスル1本、トイホーン

奏者3：チェロ、トライアングル、ミニグロッケン（ソプラノ）、攪拌ドラム、ホイッスル、スライドホイッスル2本、ウインドチャイム

大型絵本は奏者1がめくった。但し、1人あたりの演奏楽器数を減らす事で10人程度の合奏にすることも可能な編曲となっている。特に、奏者

3は多数の楽器を担当するため、できれば2人以上で分担しての演奏が望ましい。その場合には、奏者1が担当したシンバルのパートも兼任する必要がなくなり、奏者1が朗読に専念できる。これにより、絵本の朗読を保育者や、ある年齢以上の子どもが担当すること、あるいは演劇に関わる人が担当することも可能となる。また、奏者3のチェロパートは、他の旋律楽器、例えば鍵盤ハーモニカやサクソ等で代用が可能である。また、奏者3は同時に2本のスライドホイッスルをくわえて演奏した。

3.4. 二つのモデルタイプと本プログラムの制作方法

みらい堂のこれまでの活動から構築した絵本を用いた音楽作品のモデルタイプは「ストーリー型」と「1冊1曲型」の二つである（疇地ら、2019、表2）。今回の演目として選んだ『さつまのおいも』は物語の展開が比較的はっきりしており、「ストーリー型」にあたる。過去の成功作品の持つ特徴と同じように、絵本と音楽のバランスをとるため、名曲の聴かせどころの場面を作るように配慮した。

表2：絵本とクラシック音楽による作品のモデルタイプ

モデル1：ストーリー型 例：やさしいライオン、スイミー	モデル2：1冊1曲型 例：ぴょーん
-絵本と音楽のバランス -物語の展開がはっきりしているものを選ぶ -楽器の見せ場を作る	-参加型にする -躍動感のある曲、身体表現に向けた曲を選ぶ

過去の成功作品に共通する特徴（表3）や、音楽や効果音制作法（表4）を考慮し作品制作を行った。

今回の作品は過去に上演した作品と比べ、音楽に言葉を重ねる場面を多くした。これは、音を重ねることにより臨場感やワクワク感が生み出される効果を高めるためである。初演にあたる実践ではマイクなどの拡声装置

を使用しないため、朗読の声が聴きやすいように、声に楽器の音を重ねる場合はピアノの中音低音部を用いる、目立つ音の楽器（ホイッスル等）の使用は避ける等の工夫をした。しかし、一部に攪拌ドラムと重なり言葉が聴こえ難い部分もあった（楽譜3、24小節目、絵本 p.8）。

表3：成功作品の持つ特徴

- 大型絵本の存在
- 絵と文字のバランスが良く、視覚的にメリハリが聞いている。

- 絵本と音楽のバランスが良い。
 - 名曲の聴かせどころがある。
 - 絵本自体のストーリー展開がはっきりしている。
- 変奏曲や組曲を使用することによる、全体の統一感、イメージの統一
- 楽器の見せ場がある。

表4：音楽・効果音制作法

音楽や効果音を付ける場面

- (1)キャラクターが登場、行動するとき
- (2)場面が転換するとき
- (3)場面の状況を表すとき
- (4)登場人物の感情を表すとき

それぞれどの部分に音楽・効果音を付けるかを明確にし、言葉と音楽の相乗効果で聴き手により深く伝わるようにする。

物語の始まりや終わり、場面転換等の節目にシンバルを用い、乳幼児の注目が集まるようにした。その他、スライドホイッスルやトイホーン（玩具のラッパ）など、通常のクラシック音楽では使用頻度が低く、かつ特徴のある音色を持つ楽器を用い、乳幼児の興味を集めるように工夫した。

オープニングやエンディング、綱引きなど躍動感溢れる場面では《終曲（闘牛士）》《アラゴネーゼ》の勇ましい曲を使った。おいもの日常を描く朴訥とした場面では《アルカラの竜騎兵》、おいものが眠る穏やかな場面では《間奏曲》を用い相乗効果を狙った。

4. 楽譜

4.1. 記譜上のルール

記譜に際し、これまでのこれまで制作した乳幼児向け作品と同じルールを用いた(疇地ら、2018)。そのルールを以下に示す。

(1) 通常の楽譜と同じように左から右側へ音楽が進み、同時に進行するパートは譜表線等でつないで表示する。

(2) 楽譜上のページ数は、童心社により出版された絵本にみらい堂で便宜的に付したものである。物語の本編が始まる見開きページの右側を1ページ目とした。

4.2. 楽譜《さつまのおいも》みらい堂編曲

楽譜『さつまのおいも』(みらい堂編)

表紙

楽譜1: オープニング

Allegro

The musical score is for the opening of 'Satsuma no Oimo'. It is written for piano and features a 2/4 time signature with a key signature of two sharps (F# and C#). The tempo is marked 'Allegro'. The score consists of three systems of music. The first system starts with a cymbal hit and a piano introduction. The piano part begins with a series of chords and eighth notes. The second system continues the piano part with more complex rhythmic patterns and trills. The third system features a more active piano part with triplets and a final cadence.

Vocal: (タイトルコール) 『さつまのおいも』、中川ひろたか文、村上康成絵

pp.1-5

楽譜 2: おいも登場

Andante

Piano *pp*

vocal: おいもは つちのなかで くらしています

ごはんも たべるし はも みがきます

トイシにも いくし

おふるにも はいります

Vocal 2: いーち、にーい、さーん、しー、ごー、ろーく、しーち、はーち

クラシック音楽を用いた絵本の上演3 『さつまのおいも』

pp.6-11

楽譜3: トレーニング

♩ = 72

Perc./Vocal

Whistle

Piano

Vocal

Whistle

おいっ ち にー さん し にー にー さん し

♩ = 52

みんなで トレーニングをします ええい - ええい

(絵本 p. 8) 攪拌ドラム

Presto

accel. びゅーん びゅーん

accel. cresc.

The musical score is divided into three systems. The first system features a piano accompaniment with a treble and bass clef. The treble clef part consists of a series of chords, while the bass clef part has a rhythmic pattern of eighth notes. Dynamics include *fff* and *rit.*. The second system is titled "Allegro" and includes a whistle part. The whistle part is written on a single staff with a treble clef and contains four measures of music with the Japanese text "フアイト" (Faito) underneath. The piano accompaniment continues with a treble clef part of chords and a bass clef part of eighth notes, with a dynamic of *mf*. The third system continues the piano accompaniment, with the treble clef part showing a crescendo and acceleration, marked with *accel.* and *cresc.*, and a final accent mark (^) over the last note.

クラシック音楽を用いた絵本の上演3 『さつまのおいも』

pp. 12-13

楽譜4：お昼寝

Andante

Windchime

Piano

Glo.

vocal:ねるときはみんないっしょ どんなゆめをみるのかな

pp

The musical score is arranged in four systems. The first system shows the Windchime part with a decorative flourish and the vocal line. The second system introduces the Piano accompaniment with a triplet in the right hand. The third system continues the piano accompaniment with more triplet patterns. The fourth system concludes the piece with sustained chords in the piano part and a final melodic phrase in the vocal line.

pp. 14-15

楽譜 5 : 子どもたち登場

Cymbals

Piano

ff

Vocal: おいものはたけに

こどもたちがやってきました

pp. 16-21

Vocal: さあ つなひきです

楽譜 6 : 綱引き

Moderato

Cello

Piano

pp

Vocal: うんしょ とこしょ うんしょ とこしょ

クラシック音楽を用いた絵本の上演3 『さつまのおいも』

The musical score is presented in four systems, each with a bass clef staff on top and a grand staff (treble and bass clefs) on the bottom. The key signature is one flat (B-flat major or D minor). The first system begins with a *mf* dynamic marking. The second system features a *cresc.* marking in the bass line. The third system includes a *f* dynamic marking and a triplet of eighth notes. The fourth system contains a *dim.* marking, a *mf* marking, and a *giva bassa* instruction. The piece concludes with a change in key signature to three sharps (F# major or C# minor) and a 2/4 time signature.

Cymbals

Triangle

ff

sfz

Triangle

Triangle

Triangle

Cymbals
Triangle

スッポーン!
わたしたちの
まけで ごわす

ritardando

pp. 22-27

楽譜7：焼き芋大会

gva.

Piano *p* *gliss.*

Vocal: ほうさくだ ほうさくだ

(gva) ほうねん まんさくだ

(gva) はっぱをあつめてたぎびして

(gva) みんなでうれしい やきいもたいかい

(gva)

疇地 希美・嶋田 ひろみ・山本 八千代・吉村 雅美

(*sva*)

Vocal: ほく ほくおいしい

(*sva*)

あまくておいしい

(*sva*)

いっばい いっばいたべました

pp. 28-31

楽譜 8 : おなら

任意のリズムで

そしたら プーっ あっちで プーっ

こっちで プーっ あれあれみんなで プップ プー

クラシック音楽を用いた絵本の上演3 『さつまのおいも』

くさーい くさーい

ad lib. ad lib. ad lib.

p.32

楽譜 9：エンディング

Allegro

Piano *ff*

tr

tr

tr

tr

両手で glissando

Cymbals
slide whistle

vocal: はっはっはっ わたしたちの かちでござす

終

5. 実践

5.1. 乳児と保護者を対象とした音楽会

この音楽会は、子育て支援団体から「子育てに忙しい母親たちに音楽でリラックスしてもらいたい」との依頼を受け、実現した。音楽会は2018年10月12日11時30分からA市S公民館にて行われた。参加人数は親子30組（大人30人、子ども34人）であった。

参加者は公民館の公募に応じた20組の親子と、会場に隣接した子育て支援室で遊んでいた親子らが当日参加した。会場に同席していたのは参加者に加え、演奏者3人と子育て支援団体スタッフが2名であった。絨毯を敷いた公民館の第1和室（15畳）と第2和室（12畳）に、参加者が床に座って鑑賞し、第1和室の前方で演奏者が演奏した。

当日の演奏プログラムは、最初に絵本『スイミー』（三善晃作曲『海の日記帳』、ピアソラ作曲『鯨』他）を上演し、休憩の後、絵本『さつまのおいも』（ビゼー作曲『カルメン』第1組曲）を上演した。音楽会の最後に《しょうじょう寺の狸ばやし》と《村まつり》を会場に同席していた全員で歌った。演奏会の様子は、iPhone11のボイスレコーダーアプリで録音した。

5.2. アンケート結果

無記名の回答選択式質問用紙を音楽会終了後に配布した。回答の提出をもって研究協力への受諾したことになる旨を口頭で説明し実施した。回答は29名から得る事ができた。回答者は全員母親（20代2名、30代24名、40代3名）であった。そのうち有効回答数は25であった。

アンケートでは、回答者の属性（性別と年代）の他、当日上演したプログラムのうち『スイミー』と『さつまのおいも』について、「ストーリーを知っていたか」、「使用した音楽を知っていたか」、「演目は面白かったか」、「音楽は絵本にあったか」の4点について質問した。

回答の選択1（知っていた・面白かった）を3点、選択2（タイトルは

知っていた・知っている部分もあった・まあまあだった)を2点、選択3(全く知らなかった・つまらなかった)を1点に置き換え点数を計算し、二つの作品の感想を比較した。なお、『スイミー』はみらい堂の再演回数上位の演目であり、主な楽曲は三善晃作曲『海の日記帳』を使用している(疇地ら、2018)。

その結果、両作品の点数に有意な差は認められなかった($F = 0.78$ 、有意差なし、表1)。物語の認知については『スイミー』の点数が高く、音楽の認知度は『さつまのおいも』で使用した『カルメン』組曲の方がスイミーの『海の日記帳』よりも高かった。作品の評価に関する項目について両作品間に大差はなかった。この結果から、みらい堂の経験により構築されたモデルタイプと作品制作の方法論に則り作られた『さつまのおいも』は観客である母親たちに高評価であったと言える。このことから、先に示したモデルタイプと作品制作方法の妥当性が確認できた。

表5. 保護者対象アンケート結果、項目別の点数

絵本タイトル 使用楽曲	さつまのおいも 「カルメン」組曲	スイミー 「海の日記帳」他
絵本の認知度	44	64
音楽の認知度	41	29
面白さ	74	75
絵本と音楽の相関性	73	73
平均	58	60.25

5.3. 考察

演奏中や演奏後の観客の反応から、演奏会を楽しんでいる様子が伺えた。この音楽会の依頼者である子育て支援団体のメンバーから以下の感想が後日メールで届いた。

- ・日ごろ読み聞かせをしてる絵本に音楽が付くだけで世界観が変わってよかった。
- ・臨場感があって引き込まれてしまって子どもよりも親の方が楽しんでしまったようだった。
- ・生演奏がよかった。
- ・楽しかった。

この音楽会をきっかけに翌年以降も依頼を受けたことから、母親のための音楽会として成功したと判断できる。

一方で、作品の制作者かつ演奏者と演出担当者であるみらい堂メンバーからは様々な問題点・反省点が指摘された。

一つ目は、絵本の文章の持つ言葉のリズムに関する問題である。言葉のリズムが面白い絵本に音楽をつけるのは難しい（疇地ら、2019）。中川ひろたかの文章のリズム、例えば「うんしょとこしょ」（pp.18-19）、「はっぱを あつめて たきびして みんなで うれしい やきいもたいかい、ほくほく おいしい あまくて おいしい いっぱい いっぱい たべました」（pp.24-29）などの2拍子系の拍節感を持つ言葉のリズムが、《終曲（闘牛士）》の音楽をつけることで消えてしまった。しかし、日本語の言葉が持つリズムを生かすように音楽に乗せて音読すると、音楽作品としての楽しさは逆に失われてしまう。言葉のリズムと音楽の楽しさのどちらを重視するかは、観客に対し何を伝えるか、何を表現するかにより左右される。今回の作品制作においても言葉のリズムが楽しい絵本に音楽をつける難しさを再確認した。

二つ目は、絵本の対象年齢と観客である未就園児の発達年齢に関する問題である。この絵本は「保育園の行事」をテーマとし、保育園で人気の絵本だと出版社のサイトで紹介されているが、今回の演奏会の観客は未就園児のみであった。『さつまのおいも』の演奏の終わりでは観客の拍手の始まるまで数秒の空白時間があった。これは、綱引きの勝敗ではなく臭いオナラによる逆襲でおいもの勝利とする物語の結末の分かり難さによるもの

であると考えられる。つまり、物語が起承転結ではなく、起承転結と2段落ちの構成になっていることが分かり難さとなっていることが考えられる。また、フロイトの肛門期（2～4歳）にあたる幼児にはこの物語のハイライトであるおならは心をくすぐる対象である。しかし、この実践の観客である未就園児はまだ口唇期（1歳以下）であったことからこのプログラムを幼児を対象として上演し、検証する必要がある。

その他、奏法や編曲の工夫が必要な箇所も問題点として挙げられ、今後の課題とした。

6. おわりに

今回の音楽会のために新たに制作した作品『さつまのおいも』を通し、筆者らによる音楽集団〈みらい堂〉がこれまでの実践経験から構築したモデルタイプ・作品制作方法論を検証した結果、その妥当性が確認された。

アンケート結果から、モデルタイプに合わせ作品制作方法論に則り創作した『さつまのおいも』の面白さは、既に好評を得ている作品である『スイミー』と比較し、点数的に同程度であった。また、両作品とも絵本と音楽は合っていると大多数の観客は判断した。『さつまのおいも』は、これまでの経験から構築した方法論に基づき、楽器の見せ場（トイホーン、スライドホイッスル、チェロ）、音楽の聴かせどころ（グロッケン《間奏曲》、チェロ・ピアノ《終曲（闘牛士）》、ピアノ《アラゴネーゼ》等）、組曲を使用することによる全体の統一感、があるように制作され、これらが作品の面白さへの評価につながったと考えられる。

今回のアンケートは未就園児の母親が対象であることを考慮し、回答のしやすさを優先した設問になった。そのため、具体的にどの要素がより作品制作において重要であるかまでは検証することができなかった。また、絵本『さつまのおいも』本来の対象年齢にあたる幼児の反応を調べる必要もある。これらを今後の研究の課題とする。

参考文献

- 疇地希美, 嶋田ひろみ, 山本八千代, & 吉村雅美. (2018). クラシック音楽を用いた絵本の上演: 絵本の音楽会より 『スイミー』. 中部大学現代教育学部紀要= Journal of College of Contemporary Education, (10), 105-112.
- 疇地希美, 嶋田ひろみ, 山本八千代, & 吉村雅美. (2019). クラシック音楽を用いた絵本の上演 2: 絵本の音楽会より 『ブレーメンの音楽隊』. 同朋福祉, (26), 227-260.
- 疇地希美, 嶋田ひろみ, 山本八千代, & 吉村雅美. (2019). 絵本を活用した音楽会の実践報告—モデルタイプの構築を目指して—. 第17回 (かきつばた) 大会報告. 音楽表現学 vol.17. P.145.
- 田島信元 (2018). 序章 4 「歌いかけ・読み聞かせ」活動は障害発達を支援する. 歌と絵本が育む子どもの豊かな心 歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ. 田島他編著. ミネルヴァ書房. pp.20-24
- 田島信元, 佐々木丈夫, 宮下孝広, 秋田喜代美. (2018). 歌と絵本が育む子どもの豊かな心 歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ. ミネルヴァ書房.
- 谷川俊太郎・元永定正. (1977). もこもこもこ. 文研出版.
- 中川ひろたか, 村上康成.(1995). さつまのおいも. 童心社.
- 松岡達英.(2000).ぴょーん. ポプラ社.
- やなせたかし. (1975). やさしいライオン. フレーベル館.
- レオ・レオニ. (1986). スイミーちいさなかしこいさかなのはなし. 好学社.
- For Crying Out Loud! Wigmore Hall, <https://wigmore-hall.org.uk/learning/for-crying-out-loud>, 2020年8月30日閲覧
- Malloch, S., & Trevarthen, C. (2009). Musicality: Communicating the vitality and interests of life. Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship, 1, 1-10.
- SONGBOOK Cafe 中川ひろたかプロフィール, <https://www.songbookcafe.com/nakagawa/profile.php>, 2020年8月30日閲覧
- しばた・かつひこ. ビゼー (1838-1875) 歌劇「カルメン」組曲より, 東京オペラシティ第8回平日の午後のコンサートプログラムノート, 2018年1月29日. P.33

クラシック音楽を用いた絵本の上演3 『さつまのおいも』

参考楽譜

Bizet, Georges. (1885). Carmen Suite No.1 for Piano. Guirand, Ernest (ed.). Paris: Choudens pere et fils.

<http://ks.imslp.info/files/imglnks/usimg/4/49/IMSLP20954-PMLP15769-Bizet-CarmenSte1-arrPf.pdf>

※ 「『同朋福祉』に関する内規」により「実践報告」として査読済み

疇地 希美（本学専任講師：音楽Ⅰ）

嶋田ひろみ（本学非常勤講師：音楽Ⅰ）

山本八千代（本学非常勤講師：音楽Ⅰ）

吉村 雅美（本学非常勤講師：音楽Ⅱ）